

J-CEF NEWS

no. 10

2016 SUMMER

リレーエッセイ

○ 教育者こそ現場に足を運んでほしい！

／東末真紀（神戸大学学生ボランティア支援室）

実践事例紹介

○ 社会と自分をつなぐ授業 ―中学校における「グローバルシティズンシップ科」の取組から―

／松倉紗野香（埼玉県上尾市立東中学校教諭）

書評

○ 質問（著：田中未知）

たった一つを変えるだけ ―クラスも教師も自立する「質問づくり」―

（著：ダン・ロススティン、ルース・サンタナ 訳：吉田新一郎）

／山口洋典（立命館大学共通教育推進機構准教授）

特集

○ 「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」

／川口英一（前 神奈川県立湘南台高等学校校長、現 学校法人鶴嶺学園理事）



教育者こそ現場に足を運んでほしい！



神戸大学
学生ボランティア支援室 東末真紀

東北沿岸部の方々のお話は、まだ進行中のものもあり生々しい。

津波の向こうから声は聞こえるけれど助けにいけなかったこと、水も食べ物も届かず、地域の人と身を寄せあって助けを待った数日間、(仕方のないことだけれど、といいながら)住み慣れた土地には戻れないこと、海と集落を分断する大きな防潮堤ができるのはいやだけど承諾せざるを得なかったこと…。それらの感情は現地の方々だけではなかなか取り扱いきれないものだ。震災から5年がすぎ、故郷の風景が変わっていく毎日の中でのその時々思いはどこかに取り残されたまま、さらに触れられにくくなってしまっているように思える。

熊本は、2度の大地震に梅雨の大雨被害も重なって、被災はさらに拡大してしまった。震災直後から、不安や悲しみを横に置きながら奮い立たせ前向きに動いていた被災された方々の現在の心労は計り知れない。もう気持ちを横に置いてはおけない人が出ているかもしれない。そのような中、仮設住宅などでの仮住まいがスタートする。プライベート空間が確保されると同時に、横に置いておいた(自分だけでは向き合いきれない)感情がどっと押し寄せてくるよ、と、阪神淡路大震災を経

験された方がおっしゃっていたことから考えると、できるだけこのフェーズの早期で、気持ちをしっかり吐き出し共有できる場づくりを確立させないといけない。

東北で被災された住民のもとへ足を運び続ける学生のI君は、東北での経験を振り返りながら同志たちにきっぱりという。

「やっぱり(東北には)これまでもこれからも“寄り添い”が必要だと感じている。僕はこれからも一人一人の、それぞれの思いをしっかり受け止めたい。」「そして、東北の経験を活かし、今、熊本で大変な思いをしている人たちに、つぶやくことができる場や時間を作って差し上げたい。」それを聞いた、被災地支援を経験していない仲間たちも大きくうなずいた。

正直なところ、被害を受けられた方々が最も欲しているだろうポジションをしっかり選ぶことができることにびっくりした。(能力、体力的に)どれまでできるのか、にとらわれず、強い思いを頼りに、内在している問題解決力を自ら引き出して、行動しようとしている。一番不足していて、被害を受けられた方々が最も欲しているだろうポジションをしっかり選ぶことができる。なんと若者たちはしなやかで力

強いのだろうか。

私の仕事は、若者たちをできるだけ多く現場に届けるコーディネーターという仕事をしている。まだ2か月を過ぎたところで、大学で行うコーディネートということで、気にしなければならぬことが多くあることは否めないが、少なからず、指導とか管理とかいうような概念を取っ払わないと現場のリアリティが失われ、若者たち自身が内在する力を発揮しようとするプロセスを殺してしまうと実感している。そして、仕掛ける側の人間自身の、心揺るがされ何かをせざるを得ないような気持ちになる現場経験でしか、健全な機会を提供できないと日常を通じて思う。

被災地は、潜在化していた社会課題が一気に噴出する現場である。きっとどの方にも動き出さずにはいられなくなる課題があるはずだ。私は、教育者と言われる方々にこそ、そのような現場に足を運んでいただき心揺るがされる体験をしていただきたいと強く願っている。そのプロセスを体験してこそ、内在的な濃緑を引き出す環境が作ることができるのではないか、と思う。子どもたちに何をどう見せ、経験させ、伝えていくのかはそれからだ。
東末真紀(m-tousue@mub.biglobe.ne.jp)